

超低出生体重児の短期予後に関する後方視的研究

木下竜太郎¹⁾ 森 聡子¹⁾ 堤 信¹⁾
井上 真改¹⁾ 中村 公紀¹⁾ 太田 栄治¹⁾
瓦林達比古³⁾ 廣瀬 伸一¹⁾

1) 福岡大学病院総合周産期母子医療センター新生児部門

2) 福岡大学医学部小児科

3) 福岡大学医学部産婦人科

要旨：2000年～2005年に福岡大学病院総合周産期母子医療センター新生児部門に入院した超低出生体重児の短期予後について後方視的に検討した。入院数105例のうち生存退院した児は68例（生存率64.7%）だった。在胎23週以下での生存率は22.2%で、26週以上では80%以上だった。早期新生児期に死亡した児は24例で死亡例全体の64.9%を占めており、またその内の10例（27.0%）が生後24時間以内の死亡であった。生存退院した児でも在胎週数26週未満では中枢神経合併症などの後障害を示唆する所見が33.3%にみられた。今後の早期新生児死亡を減らすためにはハイリスク妊娠の早期発見と分娩時期の決定を一緒に検討していくなど産科医と新生児科医の連携が不可欠であると考えた。

キーワード：超低出生体重児，短期予後，新生児特定集中治療室，ハイリスク新生児医療